

# ちよひつご話

第二二二号

娑婆の苦

今回の西日本豪雨被害は今迄の二極集中から広範囲に広がり、被害の拡大につながりました。いまだに避難所で仮住まいの方々も多く先行きの見えない状態です。平成の水害で最悪といえます。我々坊さんは日々の勤行で 天災地変 殉難横死 三界万霊 有縁無縁 乃至法界 平等利益」と回向し供養しております。又、何事も無きようにと 天下和順 日月清明 風雨以時 災厲不起 国豊民安・・・と祈念もしているのですが力不足で申し訳ない事です。思えば、法然上人様も九歳の時に明石定明の夜襲を受けて、父親、漆間時国を亡くします。父親の遺言、私の菩提を弔って、との金言を守り、南無阿弥陀仏と称える浄土宗をお開きに成られました。戦であれ、事故であれ、天災であれ、病死であれ、自死であれ、**家族親族との突然の別れには慣れ睦し恩愛の情、断つ事できず、追慕の念、並々ならぬ思いがのこります。生前を慮り、丁重に供養の誠を捧げるしかありません。八月は戦没者の追悼、御先祖のお盆供養をします。本間憲一の詩に 遠い母さま お父さま お別れしてから夢の間に 永い月日が経ちました 灯ともし頃になりますと 頬を涙が流れます**と。いつまでも忘れずに供養していきたいものです。最近墓じまいやら共同墓地の話題がですが災害で無くなる家屋よりも絶える家系の方がはるかに多いと思います。家系の存続家門の存続が社会生活の基盤となり、日本の将来を支えると思います。若い人が減れば税収が減り、購買力も減り、バランスが崩れ、年寄りを支える事が難しくなります。

九歳から十七歳まで仏門に身をおいていた、水上 勉さんはある書籍の中で 大はどこに生まれても、そこに父母がいた。子の環境によっては母だけの場合もあるが、病院で生まれても、自宅で生まれても、母なる人の股間から産声を上げたのである。そして生まれてしまった環境に大きく支配されながら生きなければ成らぬとは辛いことだ。環境とは裕福な家と、貧乏な家。だが、この生誕のはじまりから人間は平等だと、憲法も菩薩もいっているのである。生まれた翌日から、我々はひどい差別の世を生きるではないか。平等なのは、金持ちの子も、貧乏人の子も、そこに産んでくれとたのんだおぼえのないことぐらいが共通していることだと、**金持ちであろうと、貧乏であろうと、娑婆の 苦」から逃げる道はありません。この世には 四苦八苦」といって、生老病死・怨憎会苦 憎い者と会う苦）愛別離苦 求不得苦 物質的な欲望が満たされない苦）五蘊盛苦 迷いの世界として存在する苦）があります。**災害に逢えば共生の生活を体験できますが普通の状態であれば個人情報云々で 隣は何をする人ぞ」全く感知しないのが現状です。気を配る必要が無いのです。ご近所付き合いも無く、人間として 間を司る必要が無く、心を配る必要性も失われ、人間としての思いやりも薄れてしまった」と思えるのです。吾が身を振り返り、できるところから直そう

三十年八月一日

善壽界善入院掛地藏尊